

巻 頭 言

I T S 時代に向けて

常務取締役 モートロニクス本部長
大 石 清 彦



アメリカの経済が再活性化を果たし、ヨーロッパもECの統合に向け非常に活発な動きをみせるなど、メガ・コンペティションの時代に入ってきた。自動車業界でも国内外で大型合併が予想を越えるスピードで進みつつある。また、自動車部品業界でも、日欧米メーカの合従連衡が加速してきた。特に電子化や環境、安全対応など次世代自動車の実現に欠かせないコア部品の開発、生産分野での提携が目立つ。欧米の研究開発力と日本の製造技術を融合して国際競争力を高めようというシナリオもある。

21世紀はコンセプト（構想力）の時代と言われる。ここにおけるわれわれのスタンスは、今までのハード製造技術の強さを維持し、これを梃子としながら、いろいろな構想力を養うことであろう。“どのように作るか”から、“どのように構想するか”への変化に対応しなければならない。いわゆる情報化社会の到来に対して、「情報化」の意味を取り違えることなくしっかりと戦略を立て、コア・ビジネスを中心とした得意分野をより強くする作戦を取らねばならないだろう。

ITS時代を迎えて、当社ではすでに事業化計画を立案し終わり、次の3事業分野に重点を置くことに決めて活動を開始している。

- 1．ナビ・マルチメディアの高度化
- 2．安全運転支援
- 3．商用車の運行管理

いづれも当社が長年にわたり経験を積み重ねてきたオーディオ・ビジュアル、エンジン・エアバッグの制御や各種のセンサ、情報通信などの既存部品事業をベースとし、それらをシステム化していこうという構想である。ナビゲーション、デジタル放送受信、ミリ波レ

ーダなど、技術開発テーマは多い。しかしながら、今後グローバル・マーケットでは差別化できる技術や商品で無ければ生き残れない。リスクを冒してもブレークスルー技術に挑戦しなければチャンスは無いと考えなければならないだろう。そこでの課題は、どのようなハードを設計することにより、どのような便益（ソフト）を人びとに提供できるかということになる。

そういう意味では、既存ビジネスに立脚したハード中心に仕事を続けようと言っても、従来よりは見えにくいところに仕事の重点が移り始めたことは確かである。設計力というのはつまりコンセプトを生む力ということになる。このことをよく認識して、今までの仕事の仕方にこだわらず、一人ひとりがそれぞれの立場で工夫して、お客様に対する新しい利便性の提供を考えなければならない。どう工夫するか？、そこでは「21世紀に向けてどんな社会を描き出せるかという構想力」がもっとも重要になるに違いない。